

ローマの信徒への手紙 1 章 1 節～7 節 (その 1)

2015 年 4 月 16 日(木)

於美瑛伝道所

はじめに

本日からご一緒にローマの信徒への手紙を読んで祈り会をいたします。本来は、お茶の会でお話ししましたように、第一と第三木曜日に行くつもりでおりましたら、先週の第一木曜日の 4 月 9 日に行くはずでしたが、「中会」の用事でできず本日になったわけです。様々な面での調整期間だにご理解いただいて、ご容赦いただきたいと思います。

さて、ローマの信徒への手紙は多くの人に愛され、読まれてきました。確かに長い手紙であり難しい面もあますが、それにもかかわらず多くの人に読まれ、場合によってはこの手紙のメッセージが教会の歩みを刷新することもあったのです。

どうして多くの人に読まれたのか、その理由は、実は単純でありまして、この手紙を読むと嬉しくなるからなのです、この手紙には福音が丁寧に展開されているからなのです。福音は「良い知らせ」という意味ですね、つまり、それを聞いたら喜ばしくなるそういう言葉のことです。そこでわたしたちも福音の言葉に預かりたい、喜びの言葉に触れたい、そう願っております。

I

そこでローマの信徒への手紙のところを開いてみて改めて気づかされることは、新約聖書には、思いの他、沢山の手紙が収められている、ということです。新約聖書 27 巻ありますが、四福音書と使徒言行録、それにヨハネの黙示録を除くと、21 巻がすべて手紙なのです。使徒パウロが教会に与えた手紙、パウロの名前を使って書かれた手紙、ペトロの手紙、ヨハネの手紙、ユダの手紙、ヤコブの手紙などがあります。

どうしてなのか、ということです。このように沢山の手紙が収められているとはどういうことか。ある面で言えば福音書だけで十分ではないかという考え方もあるかもしれない。例えば旧約聖書には律法があり歴史書があり預言書があり詩編がある、しかし手紙はほとんどないわけです。他方、新約聖書には 21 通もの手紙がある。それは、初代教会が、思いのほか、手紙のやり取りをすることによって交わりをしながら歩んでいた、ということです。例えば、コロサイの信徒への手紙の結びの 4 章 16 節にはこう書いてあります。「この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるよう取り計らってください。またラオディキアから回っている手紙をあなたがたも読んでください。」こうあります。教会は手紙の遣り取りをした、いわば聖なるコミュニケーション、聖なる交わりに生きたのである、ということです。さらに興味深いことにはローマの信徒への手紙の写本には 7 節の「ローマの人たち」という言葉がないものがあるそうです。どうやらこの手紙を次の教会へ次の教会へと回覧したらしい。これと同じようなことがエフェソの信徒への手紙でも起こっています。「エフェソにいる」という言葉がない写本があるわけです。やはり他の教会も読むためです。そういう意味でいえば「ローマにいる」という部分を「美瑛にいる」と読み替えても一向に差し支えない。使徒パウロから美瑛にいる私も一同にこの手紙は宛てられたということです。ともかく福音を伝え合う、福音を聞き合う、そういう交わりすることによって、教会は

歩んだということです。

II

そこで交わりということで思い出されるのは、デートリヒ・ボンヘッファーのことです。ドイツ告白教会に仕えてナチス・ドイツと戦い、若くしてフロッセンビュルクの強制収容所で殉教いたしました。その人が、ナチス・ドイツとの戦いの中で実践したことの一つは、説教者の養成ということでした。福音の言葉の語り手を育てていったのです。具体的にはフィンケンヴェルデに牧師研修センターをつくりまして説教の訓練をいたしました。それは、カール・バルトたちが発見したように、福音の言葉以外にナチスと戦うことはできないからです。ナチス・ドイツとの戦いは本質的に霊的な戦いであるからです。これは、何かオカルトめいた話ではなく、福音信仰を得ると、そういう霊的な戦いが見えてきます。

そして牧師研修センターでの訓練の中からは「共に生きる生活」という本が生まれました。説教者自身が福音に生きるための本ですが、これは日本の教会でも青年会などで読書会のテキストとして随分用いられました。今日読んでも少しも古くはないのです。

その本の最初のほうでボンヘッファーは、主イエスには兄弟姉妹はいないが、キリスト者には兄弟姉妹がいる、それはどのような恵みであるのかということを書いていくのです。そして兄弟姉妹が与えられているのは、福音を証し合うという意味での交わりためである、そこにキリスト者の幸いがあるということです。これは本当のことであると思います。

霊的な戦いの中であって、わたしたちは正直なところ疲れ果ててしまうことがある、うずくまって動けないことがある、あるいは自分はキリストを信じているけれども、もう教会はもういかないといったことも出てくる。だから駄目だとか信仰が足りないといった話ではなくて、だからこそ福音を語りあう。だからこそ福音を聞き合う。福音の慰めと励ましに共にあずかっていくのです。そしてこういうことは、突然、始まった新奇な試みではなく、実は、新約聖書の昔からやってくる、手紙をやりとりすることによって、福音を語り合うのです。わたしたちもこの交わりにあずかりたいのです。

III

そこでローマの信徒への手紙をみてみます。冒頭にはこんなふうに記載されていました。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選びだされ、召されて使徒となったパウロから」と手紙の差し出し人がパウロであるとしています。そして少し飛んで7節には「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストから恵みと平安が、あなたがた一同にあるように。」このようにこの手紙の受取人の名前が明記され、祈りの言葉がついています。

使徒パウロはスペインにまで行って伝道したいと願い計画を立てていました。福音は世界全体をおおっているからです。そこでその途中にローマの教会に立ち寄って、主の恵みを分かち合いたい、また支援もしていただいきたい、そういうことで手紙を出したわけですね。しかしローマの教会にパウロは行ったことがありません。いわゆる他所の教会、知らない教会です。だからこの手紙は、本来、パウロの自己紹介の手紙なのです。ところがこの手紙でパウロは自分のことを語っておらず、福音を語っています。実際、この手紙の1章～11章までは福音について書いてあり、後半の12章からは福音に生きる話になっています。どうして

そうになってしまうのか。それは、この手紙の最初にあるように、パウロとは「キリスト・イエスの僕」だからです。自分はイエス・キリストの奴隷であり、イエス・キリストを主人として仕えている、だからそういう自分を紹介することは、主人であるイエス・キリストを紹介する他はない、そこでこの手紙はイエス・キリストを紹介すること、すなわち福音を全面的に展開することになっていきました。

そこで本日、注目したのは「召された」という御言葉なのです。「召されて使徒となった」とありました。そして手紙の受け取りに人についても、「ローマの教会のみなさんへ」で十分なはずですが、やはり「召されて聖なる者となったローマの人たちへ」とある。だから「召された使徒」が「召されて聖なる者」に手紙を出している、ということになります。そしてその間の2~6節は、誰が召したのかが書いているわけです。

ところで「召す」という言葉は、わたしたちの日常生活であまりお目にかかりません。だから特別な宗教用語ではないかと思ったりします。しかし例えば、英語では、call コールと書いてある、「呼ぶ」、「呼び出す」というあのコールです。だからイエス・キリストに呼び出された者が、イエス・キリストに呼び出された者たちへ手紙を書いているわけです。そしてこの交わりの中心にいるのはイエス・キリストであるわけですね。

わたしたちは、しばしば、人は求道をして救いに至る、と思いがちです、私が聖書を読み、考え、私が教会を捜して、教会に行き、私が決心してキリスト者になったと思います。ある面から言えば、実際、そういうなっているわけです。

しかし聖書の信仰においては、そうことは事柄の一部分に過ぎないわけです。どの程度熱心に求道するかしないか、どの程度熱心に信仰するかしないか、といったことよりもっと大事なことがあるのです。それは、神が、イエス・キリストをとおして、他の誰でもない、このわたしを召し出し、呼び出した、ということです。そのことは「選び出された」とか、「神に愛された」とか言い換えられています。ともかく主イエスがまず呼び出してくださった、わたしたちが主イエスを知る前に、主イエスを信じる以前に、主イエスはわたしたちをご覧になり、御心にとめ、呼び出してくださったのです。

実際、旧約聖書のアブラハムは、神に呼び出されて、約束の地に向かう者となる、ダビデも神に召されて、主に仕える者とされていく、そして主イエスの弟子たちも、ほとんど全員が主イエスに「わたしの従え」といわれて、弟子になっていくわけです。自分で手を挙げて主に従いたいという者はほとんどいません。主イエスが呼び出すのです。

こうした召し出しについて語る最もよい解説は申命記7章です。新共同訳聖書では「神の宝の民」という小見出しがありまして、こんなふう書いてあります。

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛の故に、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。」(申命記7章6~8節)

ただ、ひたすらに神の愛のゆえに、選ばれ、呼び出されて神の宝の民とされているわけで

す。そうしてみますと、わたしたちは、神の目から見ましたときに地域の代表とされている、ということです。この世においては、先頃、地方統一選挙がおこなわれましたけれども、地域の代表を選ぶのに選挙が行われます。様々な意味で力のある者が選ばれていきます。しかしわたしたちの場合、神が召し出し、わたしたちを祝福された者として立てているのです。神にとって、わたしたちは他の民にまさって、宝物だからです。

わたしたちが信仰生活を続ける場合、頑張りが利くときもあれば、頑張りが利かないときもあります。喜びの時もあれば不安の時もあります。けれども主イエスの呼び出しは変わることなく、わたしたちを支えています。主イエスは、わたしたちが「貧弱である」ことをよく承知しています。だからそのような者を呼び出したということは、「呼び出してオシマイ、後は自己責任で従って来い」といったことではなくて、わたしたちの信仰の歩みの全生涯に渡って、呼び出した主イエスが責任を負ってくださる、ということなのです。だから、有名な「主我を愛す」というこども讃美歌の歌詞でいえば、「我弱くとも恐れはあらし」であって、わたしたちは安心して歩み出せますし、また歩み続けることが出来るのです。

IV

そこで最後にこの点を、もう一步踏み込んで申し上げますと、わたしたちは呼び出された存在である、呼び出された命そのものである、ということです。わたしたちは自分でこの世に存在すると決めて生まれてきたわけではないわけです。「わたしは江戸時代に生まれたかった」といっても、昭和平成の時代に生きていますし、「南の島に生まれたかった」といっても日本に生まれてきています。主なる神が、主イエス・キリストにあって、わたしという存在をこの世に呼び出して、命を与えて存在させているのです。もちろんわたしたちは、この殺伐とした世界において、「誰もわたしの名を呼ばない、だからわたしはいてもいなくても同じである」といった痛ましい状況に追い込まれることがあるかもしれない。けれども主イエスは、一度、呼び出して生かした存在を忘れることはありません。あなたの名を呼んでご自分との交わりへと導き、わたしたちを、責任をもって支えてくださるのです。

パウロはそういう主イエス・キリストについて3節～4節でこんなふうに言うのです。「**肉によれば、ダビデの子孫から生まれ聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方がわたしたちの主イエス・キリストです**」こういっています。ここで言っているのは、人間の目から見たら主イエスはダビデ王の子孫であったけれども、その正体は神の子であったということではありません。「肉によれば」とは、主イエスは人間とられた、しかもそれは神の民イスラエルの一人になるという仕方で人間とられた。イスラエルの民は神に逆らう者という意味でわたしたち人間の代表選手のようなものです。そういう者たちの中に入って責任を負ってくださったといっているのです。主イエスは、すなわち神の裁きを身に負うことによって、すべての者が神にしたがって生きるようにご自分の命を差し出したのです。主イエスの復活とは、主イエスが御自分の命を分け与えたというこの宣言のようなものなのです。だから主イエスに呼び出されるとは、この命に生きる者にされてしまった、ということです。

わたしたちの交わりの目的は、いつもこの恵みの事実に戻り、確かめ合うことなのです。その意味で、今日から始める祈りの集いが続けられますように願っています。